

るしかない。天才は1パーセントの靈感と99パーセントの発汗であるとエジソンが言った意味は、そこにある。かつては、頭を使う仕事は暇な人間のものであり、汗を流すのは貧しい労働者と決まっていた(アルキメデスが大発見をしたのも、入浴中だっただけではないか)。しかし工業化された社会では、頭脳労働も肉体労働と同じくらい過酷なものになった。今や、医者も弁護士も体力勝負だ。

マンハッタン計画にかかわった物理学者リチャード・ファイマンの伝記『Genius』(ジエームズ・グレイク著)の中には、こんな一節がある。

「ファイマンマンの一日は8時半に始まり、15時間後に終わる。コンピュータセンターを一歩も離れられないときもあった。一度など、31時間ぶっ通しで働き、翌日来てみると、彼がベッドに入ってから1分後に起きたエラーによってすべての仕事が止まっていたこともあった。とにかく一瞬たりとも休めない状況だった」

彼は果たして、先人たちよりも高い能力を発揮できたのだろうか。それとも、彼らより多くのコーヒーを飲んだだけだったのか。ポール・ホフマンは、著書『The Man Who Loved Only Numbers』の中で、20世紀の伝説の数学者ポール・エルデシュについてこう書いている。

「彼は、一日に19時間、10錠から20錠のベンゼドリンとリタリン、濃いエスプレッソ、それにカフェインの錠剤を飲み続け、自分を鞭打ちながら働いた。彼は好んでこう言っていた。『数学者とはコ

ーヒーを定理に変換する機械だよ』と」彼は友人に賭けを持ちかけられた。アソファタミンを1か月飲まずにいられたら500ドルを払おうというのだ。エルデシュはこの賭けに勝利したが、その1か月間はまともに仕事ができなかった。「キミは数学を1か月間後退させてしまったよ」と友人に語った彼は、金を受け取った直後に錠剤を喰ったという。

エルデシュにとつて、薬物が混入した自分こそが本当の自分だった。これは今の社会全体に言える傾向だろう。私たちは、自分自身の情緒や認識を構築するとき、内面から発する思考だけに依存しているのではなく、外からの化学添加物にも依存している。つまり、現代人の人格は、ある意味で「合成物」だ。私たちはカフェインを巧みに利用しては、目を開かせたり、意識を集中させたりしている。カフェインを断つことは簡単だが、その代わり、弁護士は時間手当を失い、研修医は落ちこぼれ、世界は1か月間、後退してしまうに違いない。

### 不可能を可能にする最高のドラッグ

合成人格とは言い過ぎかもしれない。合成人格とか化学物質による別人格の構築などと聞くと、普通はハードドラッグを連想してしまう。ティモシー・リアリーはLSDを使ってそれを実現しようとしたのだが、失敗に終わった。一般の間は彼の思想に付いて行けなかった。

彼は偉大な現代の預言者だった。それなのに、なぜ自分を変えたいなどと思っ

たのだろうか? もっとわからないのは私たちにどう変われと言っていたのかということだ。自分自身を再構築するためには、目標が必要なのだ。

その点、カフェインは最高のドラッグだ。アデノシンの働きを遮断する興奮剤であるカフェインは、いろいろな姿に変身でき、それぞれの姿には手頃な「いわゆる用意されている。赤い缶にカフェインを入れれば、それは爽快な喜びとなる。ティーポットで引き出せば、ロマンと気品が生まれる。小さな茶色の豆から抽出すれば、あら不思議、それは理性と能力を生み出してくれる。

ピーラーとワインバーグは、数あるコーヒーにまつわる逸話のひとつとして、こんな話を書いている。

「トロツキーという無名のロシア移民がいた。彼は第一次世界大戦の間、ウィーンのカフェで毎晩チェスを打っていた。典型的なロシア移民で、口は達者だが善人そのものだった。むしろ、情けない感じの男だった。1917年のある日、オーストリア外務省の役人が大臣室に飛び込んできた。彼は息を切らせながらこう告げた。「閣下、ロシアで革命が起こりました!」だが大臣は落ち着きはらって、こう言い返した。「やかましいぞ。ロシアは革命などとは無縁の国だ。だいたい、誰がロシアで革命など起こすものかね? カフェ・セントラルのトロツキー君か?」

この大臣は甘い。コーヒーを飲めば、人はすべてを可能にしてしまう。(了)



Malcolm Gladwell

『ワシントンポスト』の記者を経て現在は雑誌『ニュー Yorker』のスタッフライターとして活躍中。処女作『ティッピング・ポイント』は米国で25万部を超えるベストセラー。世の中に対するユニークなその視点は日本でも多くのマーケットに支持されている。日本の雑誌においては本稿がデビュー作となる。

カフェインがいかに現代社会を築いたか

# Java Man (後編)

マルコム・グラッドウエル 著  
金井哲夫 訳

(前回のあらすじ)かつて「興奮剤のカメレオン」としてドラッグと同列に扱われていたカフェインは、一方で多くの知識人や芸術家に愛された。荒々しいコーヒー党と「上品な紅茶党」というイメージがカフェイン文化の二面性と言われるなか、カフェインの代謝量の男女差に注目した筆者は、カフェイン文化の二面性を男と女の肉体的特性における差異で捉えようと試みた。

## アルコールを駆逐したコーヒー

さて、性別を軸にしてカフェイン文化を解釈しようという考えは、一見よさそうだが支持はされない。許容量の格差からさまざまな不公平が生じてしまうからだ。それより、コーヒーは「思想家」の飲み物であるという解釈を支持したい。これは、「コーヒーハウス」が先進的な平等主義者たちの溜まり場としてヨーロッパ全土に林立した18世紀に言われ始めたことだ。最初のコーヒーハウスはロンドンに建った。これに危機感を感じたチャールズ二世は、1676年、コーヒーショップを禁止するのだが、逆に1700年には数百軒に増えてしまった。それは

やがてパリに飛び火し、18世紀末にはパリのコーヒーハウスも数百軒に達した。そしてそこには、ロベスピエール、ナポレオン、ヴォルテール、ピクトル・ユーゴー、テオフィル・ゴージェ、ルソー、リシユリユー枢機卿といった人々が数多く出入りするようになっていた。

それまで、男たちが論議を交わす場所はバーと決まっていた。バーは、特定の階層の人々が集まる場所で、アルコールの影響もあつてか語られる内容は限定的だった。それに対し、コーヒーハウスには多様な階層や職種の人々が集まり、抑制薬ではなく、刺激薬が飲まれた。

「ここで交わされた話術が、新しい文学様式の基本となり、文字を使った新しい普通教育の元になったと言える」と、ワインバーグとヒラーも書いている。

また、初期のコーヒーハウスでは、客の多くがタバコを吸っていた。ニコチンには集中力を高め、カフェインの代謝能力を倍増させるという作用がある。つまり、通常の2倍の量のコーヒーが飲めるようになるわけだ。言い換えれば、最初のコーヒーハウスは、あらゆるタイプの男たちが、タバコのおかげで一日中コー

ヒーを飲んでいられる場であり、そのコーヒーのおかげで一日中語り合えるだけの靈感が得られる場だったわけだ。そしてそこから啓蒙思想が生まれた(こうした薬物と場所の完璧な適合が次に実現したのは、ジョン・バエズの時代だ)。

まもなく、カフェインは家庭に進入した。アメリカでは1人あたりの消費量が1830年には3ポンドだったものが、1859年には8ポンドに跳ね上がったという。このカフェインの大流行が工業化を促進させたとワインバーグとヒラーは書いている。「定時に仕事を開始し、定められた時間をきっちり働くためのエネルギーを与えることで、大勢の人間がスケジュール通りに組織的に動く」ことを実現したというのだ。

それまで人々は四六時中ビールを飲んでた。朝食にもビールで作ったスープを飲んでいたほどだ。それがコーヒーに取って代わると、酔っ払いを嫌う風潮が世界に広がり、ひいてはそれが産業革命につながったという説明もできる。

## 薬物で合成された現代人

現代社会を生きるには、ひたすら頑張



## [インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社**インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

[im-info@impress.co.jp](mailto:im-info@impress.co.jp)